

ヒュームにおける傾向について 関係する対象に同一性を帰する傾向

| | |
|------|---|
| 著者 | 大鹿 勝之 |
| 著者別名 | OHSHIKA Katsuyuki |
| 雑誌名 | 東洋大学大学院紀要 |
| 巻 | 57 |
| ページ | 35-47 |
| 発行年 | 2021-03 |
| URL | http://doi.org/10.34428/00012675 |

ヒュームにおける傾向について —関係する対象に同一性を帰する傾向—

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

大鹿 勝之

要約

『人間本性論』のヒュームの議論において、知覚する、しないにかかわらず存在するとされる、知覚とは別個の存在、外的存在を信じる信念には、感覚的な対象の連続的な存在を虚構する傾向がはたらいている。その傾向のはたらきは、外的存在を信じる信念を安定させるものではない。知覚の中断にあって、中断の前後の知覚が類似し、それらの知覚を同一と見なすか、別個のものと見なすかという対立が生じたとき、その対立から生じる当惑を除去するために傾向がはたらくときは、信念は安定するが、知覚の状況によって知覚される対象が変容する場合、傾向が知覚とは別個の存在を虚構するようにはたらいたとしても、その存在を信じる信念は安定しない。傾向はヒュームの因果論においても重要な役割を果たすが、因果論においては印象に基づく議論がなされている点で、外的存在を虚構する議論とは異なり、後者は些末なものとされる。上述の、中断の前後の知覚を同一とするか、別個のものと見なすかの対立が起きたときの不快感から外的存在を基礎づける試みは、そのような不快感をもたらず状況を前提とする限り、基礎づけとはならない。

キーワード 外的存在、ヒューム、傾向、因果論、印象

目次 1. 外的存在に関する傾向 2. 傾向についてのロープの議論 3. 傾向と安定性 4. 実体の想定と因果性における傾向 5. 不快感に由来する存在論

本論は、知覚されずとも存在する物体、知覚とは別個の存在について、傾向（propensity）がどのように位置づけられるのかを考察する。知覚の中断にあって、知覚されない対象の存在を信じる信念（belief）に傾向がはたらいているならば、その傾向のはたらきがどのようなものであるか、また、ヒューム哲学において傾向はどのように位置づけられるのか、と

ということが本論の主題である。

1. 外的存在に関する傾向

ヒュームは、『人間本性論』 *A Treatise of Human Nature* 第1巻・第4部・第2節「感覚に関する懐疑論について」 *Of skepticism with regard to the senses* において、研究の主題を「どのような原因が物体の存在を信じるようにさせるのかという問題」、物体の存在を信じるように導く諸原因に関わるものとし、この題目に関する論考 (reasoning) を、以下のように問題を区別して始める (Hume [1739-1740/2007 :125-126])。

なぜ諸対象に、それらが感覚 (senses) に現前していないときでさえ、連続した存在を帰するのか。

なぜ諸対象が精神 (mind) や知覚とは別個の存在を持つものと想定するのか。(この題目のもとに、ヒュームは諸対象の状況と関係、諸対象の存在と作用の外的な位置と独立性を含ませている。)

物体の連続的存在と、精神や知覚とは別個の存在という、これら二つの問題はともに密接に結びついているという。というのは、感覚の対象が知覚されない時にも連続して存在し続けるとすれば、対象の存在は知覚より別個であり、また逆に対象の存在が知覚より独立・別個であれば、対象はたとえ知覚されずとも存在するに違いないからである。しかし、一方の問題の解決が他方の問題を解決するとはいえ、解決が生じるところの人間本性の原理を容易に発見するために、この区別を保持し、連続した存在もしくは別個の存在の見解を産出するのは、感覚であるのか、理性 (reason) であるのか、それとも想像 (imagination) であるのかを検討しようとする (*ibid.* : 126)。

感覚については、感覚は実際にはたらいっている範囲を超えてはたらき得ないがゆえに連続した存在の考えを与えることができない。感覚は、別個の存在を表象されたものとしても、元のものとしても提示しないため、別個の存在の見解を生み出さない。別個の存在を表象されたものとして現れるようにするためには、感覚は対象と像の双方を示されなければならない。別個の存在を元のものとして提示するためには、ある虚偽を伝えなければならない、その虚偽は、関係と状況になければならないという (*ibid.* : 128)。

理性については、哲学は、精神に現れるあらゆるものは、知覚以外の何ものでもなく、中断していて、精神に依存していることを告げるが、しかるに一般大衆は、知覚と対象とを混同し、感じ、見るものそのものに別個の連続した存在を帰す、この感情はまったく理性に適っていないから、知性以外の他の能力から発しなければならないといい、知覚と対象を同じと見なす限り、一方の存在から他方の存在を推論し、経験的事実 (matter of fact) について確信させうる唯一のものである、原因と結果の関係から議論を形成したりすることは決してできず、知覚を対象から区別した後でさえ、なおも一方の存在から他方の存在を論考す

ることができないため、理性は、どのような想定に基づいても、物体の連続した別個の存在の確信を与えはしないという。そこで、この見解は、まったく想像によるほかに、このことが研究の主題とならなければならないとする (*ibid.* : 129)。

そして、類似した諸知覚にそれらの中断にもかかわらず同一性を帰することについて、二つの観念間において密接な関係がある場合は常に、精神はそれら両者を取り違える傾向があるという人間本性の一般原則 (*ibid.* : 44) を適用して考察を進める。この原則については、想像において観念を互いに連合させ、想像を一方の観念から他方の観念に移行させる観念間の関係ほど、一つの観念を他の観念と取り違える傾向をもつものはないという (*ibid.* : 135)。そこで、まず、完全な同一性を保持する対象を眺める際の精神の状態を調べ、次に、似た精神状態を引き起こすことによって最初の対象と混同される別の対象を見つけようとする。思考をある対象に固定し、その対象をしばらくの間同じであり続けると想定する場合、ヒュームは、変化を時間のうちにのみ想定し、その対象の新たな像または観念を生み出すために労力を費やしたりしない、すなわち、ある対象を知覚し続ける場合、その対象は同一とされ、新たな像を生み出そうとすることはしないという (*ibid.* : 135)。

では、同一である対象以外のいかなる対象が、精神を、それがその対象を考察する際に、同一である対象を考察する場合と、同じ状態に置くことができ、一つの観念から別の観念への同じく中断のない移行を引き起こすことができるのか、という問題に対し、互いに関係をもつ対象の継起が、変化しない対象を眺めることに伴うのと同様の、なめらかで中断のない想像の歩みを伴って考察されると答える。関係をもつ観念の間の移行は、なめらかで容易であるので、その移行は、精神にほとんど変化を引き起こさず、同じ作用の持続であるように見える。そして、同じ作用の持続は、同じである対象の連続した観察の結果であるので、同一性を互いに関係した対象のすべての継起に帰する (*ibid.* : 135)。

しかし、感覚に現前している像そのものが、真の物体であり、知覚の中断した像に完全な同一性を帰するにしても、現れの中断は、同一性と反対であるように見え、これらの類似した、中断の前後の知覚を互いに異なったものと見なすように自然に導くので、この矛盾から生じる困惑が、これらの中断した現れを、一つの連続した存在という虚構によって繋ごうとする傾向を生み出す。これが、この錯覚が与える、途切れた諸知覚の現われを連続した存在によって結合する傾向の説明になる (*ibid.* : 136)。

その傾向について、以下のとおり説明される。感情あるいは情念に矛盾するものは、外的対象の対立から生じるものであれ、内的原理の争いから生じるものであれ、不快感 (uneasiness) を与える。逆に、自然の諸傾向と適合し、それらの満足を外的に促進するか、それらの動きと内的に一致するものは何であれ、快感を与える。知覚の中断の場合、互いに類似する知覚についての同一性の考えとそれら知覚の現れにおける中断との間に対立があるので、精神はこの状況において不快になり、この不快からの救済を、一方の原理を他方の原理の犠

性にすることに求めようとする。互いに類似した知覚に沿っての思考のなめらかな移行は、それらの知覚に同一性を帰するようにさせるので、この見解を捨てることは躊躇される。それ故、知覚は、もはや中断してはらず、変化しない存在と同じく連続した存在を保持し、完全に同一するものであると想定する (*ibid.* : 136-137)。

外的な諸対象は、見られ、触れられ、精神に現前するようになる。すなわち、それら諸対象は、知覚の結合した堆積、すなわち精神に対して、現在の反省と情念によって知覚の数を増すことと記憶に観念を蓄えることにおいて知覚にきわめて大きな影響を及ぼすような関係を獲得する。それゆえ、同じ連続した中断しない存在が、その存在そのものに何の真の、または本質的な変化もなしに、ある時は精神に現前し、ある時は精神から不在になることができる。感覚に対する中断した現われは、必ずしも存在における中断を含意しない。感覚的な諸対象または知覚の連続した存在の想定は、何らの矛盾を含まない。諸々の知覚の正確な類似性がそれらの知覚に同一性を帰するとき、見かけの中断を、間隔を充たしそれらの知覚に完全な同一性を保存することができる、連続して存在するものを虚構することによって取り除くことができる (*ibid.* : 138)。

また、ヒュームはこの連続的な存在を虚構するだけでなく信じてもいることを指摘し、どこからその信念が生じるかを検討する。知覚の中断にあっても中断の前後に知覚された事物を同一とする傾向は、中断した知覚を連続的な存在によって結合する傾向をも与えるが、ここに、感覚的な対象の連続的な存在を虚構する傾向が指摘される。この傾向は、記憶のある生氣ある印象から生じるので、その虚構に生氣を与える。言い換えれば、物体の連続した存在を信じさせる (*ibid.* : 138)。

2. 傾向についてのローブの議論

ローブは著書『ヒュームの『人間本性論』における安定性と正当化』 *Stability and Justification in Hume's Treatise* の第5章「関係する対象に同一性を帰する傾向」“The Propensity to Ascribe Identity to Related Objects”において、関係する対象に同一性を帰する傾向についての3つの説明をしている。まず、ローブは、上述の、物体への一般大衆の信念の説明、『人間本性論』第1巻第4部第3節「古代哲学について」 *Of the ancient philosophy* における、物質的実体への信念についての説明、『人間本性論』第1巻第4部第6節「人格の同一性」 *Of personal identity* における、非物質的実体、すなわち魂への信念についての説明において、関係する対象に同一性を帰する傾向をみている (Loeb [2002 : 139-140])。

物質的実体についてのヒュームの説明は以下のようなされる。対象の継起する別個の諸性質の観念は、きわめて密接な関係によって結合されているので、精神がその継起をたどる際に、継起の一つの部分から他の部分に、容易な移行によって運ばれるに違いなく、まるで同じ変化し得ない対象を熟視しているように、その変化を知覚することはないであろうこと

は、明らかである。この容易な移行が、関係の効果、あるいはむしろ本質である。そして想像は二つの観念の精神に対する影響が似ている場合には、一方の観念を他方の観念と容易に間違えるので、たがいに関係している諸性質のこのような継起が、容易に変化せずに存在する一つの持続対象と見なされるようになる。思考のなめらかで中断しない思考の歩みが、両方の場合に類似するので、精神を容易に欺き、結びつけられた性質の可変的な継起に同一性を帰させる (Hume [1739-1740/2007 :145])。

しかし、継起を考察する方法を変え、継起する時点を通じて継起を徐々にたどるかわりに、継起の持続時間内の二つの別個の時期を同時に眺め、継起する性質の異なる状態を比較するならば、徐々に生じるときには感得できなかった変化が重大なものに見え、同一性をまったく失わせるように見える。このようにして、対象を眺める観点の相違と、比較する二つの時点の近さと遠さの相違から、考え方に一種の反対が生じる。この矛盾を調停するために、想像は知られず見えないあるものを虚構し、それをこれら一切の変化のもとで同じであり続けると想定する。そして、この理解不可能なあるものを、実体 (substance) あるいは根源的で第一の質料 (original and first matter) と呼ぶ (*ibid.* : 145-146)。

そして、魂、あるいは自己というものについての説明、人格の同一性についての説明は以下のようになされる。ヒュームは自己の内に最も深く分け入ってみるに、見いだすものは常に熱や冷、明や暗、愛や憎、快や苦など、あれやこれやの個々の知覚であり、いかなる時も知覚なしには自己を捉えることができない。知覚以外には自己を観察することができない、という。そして、自己自身という単純で持続するものを知覚できるような形而上学者を別にすれば、人間は、途方もない速さで次々に継起する、絶え間ない流動と動きの内にある様々な知覚、ないしは集合にすぎない、とする (*ibid.* : 164-165)。

そこで、このような継起する知覚に同一性を帰し、全生涯を通じて無変動で無中断な存在を所持すると仮定する傾向はどこから生じてくるのかという問題の解明に当たって、ヒュームはまず動植物に帰する同一性を説明し、その論法をもって、人格の同一性を解明しようとする。しかしながら、変動し、あるいは知覚上の中断がありながらもなお同一であり続けるとされる事物は、類似、接近、因果性によって結合された諸部分の継起から形成されたものにすぎず、こうした継起は多様性という概念に応答するので、それに同一性を帰するのは間違いによってのみ可能となる。人格の同一性は単なる虚構された同一性にすぎず、動植物や舟、家に帰する同一性に似た種類である (*ibid.* : 165-169)。

ローブは、これらの3つの説明は一般的な図式に一致するといひ、以下のように述べる。物体への信念の場合には、中断するとしても変化のない継起する可感的対象を経験し、物質的実体への信念の場合には、変化するにしても中断のない継起する可感的性質を経験し、魂への信念の場合には、中断もし、変化もする、継起する可感的知覚を経験する。各々の実例において、中断のある関係した対象の継起の経験は3つの段階の心理学的な反応を引き起こ

す。

- (1) 関係した対象の継起に同一性を帰する傾向により継起する対象に同一性を帰する、ないしは、同一性を帰する傾性 (tendency) あるいは性向 (propension) をもつ。
- (2) 関係した対象における中断や変化はそれらの対象を異なったものあるいは多様なものと見なすように導く。
- (3) 矛盾を解決あるいは除去する試みにおいて、中断のなく変化しない、そこから厳密な意味で同一である対象が存在すると想定する。物体への信念の場合においては、知覚されないときの中断の間知覚は連続した不変な存在をもつと想定し、物質的実体への信念の場合には、経験された可感的性質とは違って、中断されることなくまた不変な、知られず見られない対象を想定し、魂への信念の場合には、経験された知覚とは違って、中断されることもなく、変化もしない実体を想定する。(Loeb [2002 : 140-141])

ローブが述べているように、ヒュームにおいては、このように図式化された説明、ローブの言葉でいえば信念形成のメカニズム (belief-forming mechanism) は正当化されえない。ローブは次のようにいう。ヒュームのテキストの一般的な概要から、ヒュームは、彼が説明するために傾向を引き合いに出した信念は正当化されないことを示そうとしていたことは明らかである。上記の段階 (1) では傾向の作用は間違いや錯覚に基づいている。傾向は結局内在する矛盾を解決する、矛盾をはらんだ試みである形而上学的な信念に導くが、それらの信念は、抑えられうる些末な信念形成のメカニズムに依っている (*ibid.* : 141)。

それでは、ローブが図式化した (3) の段階において、信念に安定性がもたらされるのだろうか。

3. 傾向と安定性

以下、ローブの論述 (Loeb [2002 : § V, 3]) を追いながらヒュームの議論を検討する。ローブは、上で引用した3つの段階の反応についてのヒュームの取り扱いに、その反応の一般大衆の物体への信念への適用と、物質的実体そして非物質的実体への適用において不一致が見られることを指摘する。物質的実体と非物質的実体の場合には、上の (3) の段階での実体への信念は (2) の段階での矛盾を隠し回避するが、基底にある対立や不安定性はまだ残っている。反対に、完全に似ている諸知覚についての連続的存在への信念は、表明される対立を除去している (*ibid.* : 152)。たとえば、部屋を眺めて、目を閉じ、また部屋を眺め、目を閉じる前の知覚と閉じてまた開いた後の知覚とが類似していることが見出されたとき、類似性に従って後との知覚から前の知覚への容易な移行が生じ、知覚の中断の前後の部屋が同一であると見なさせる。しかるに、知覚の中断は、中断の前後の知覚を別のものと見なさせる。そこで精神は困惑し、不快になる。そのような状態の救済として、知覚の中断にあっても部屋が存在するという連続的存在が虚構される。しかし、そのような虚構によって当惑

した状態、不快な状態が回避されるならば、対立を除去しているということができる。実体への信念については、その実体がどのようなものであるか、という不安定な状態が続いている。

ヒュームは完全に似ている知覚についての連続的存在への信念が安定しているとは結論していない。この信念は、実体とは違って、上記(2)の段階で対立の解決として安定しているが、他の信念と対立した状態にある。ローブは、ヒュームが、ほんの少しばかりの反省や哲学によって、さらにいえば、きわめて平明な経験によって、第4の段階に至ることを主張する、という。

(4) 二重に見える現象や知覚の相対性についての反省が、知覚は精神から独立した存在をもたず、したがって知覚されないときは連続的存在をもち得ないことを示す。(ibid. : 152)

ヒュームは、一方の目を指で押すと、すべての対象が二重になることを知覚するが、その二重になった知覚に連続的な存在を帰することはなく、知覚が諸器官や神経や精気(spirit)の状態に依存していること、そのことは距離に対応した対象の見かけの増大と減少、対象の形の見かけの変化、病気や変調から生じる対象の色や他の諸性質の変化などの経験的事実から確かにされることを指摘する(Hume [1739-1740/2007 :140])。

哲学者たちは(3)の段階での、完全に似ている知覚は連続的存在をもつという信念との矛盾に巻き込まれ、矛盾による不快な状態を和らげるために

(5) 哲学者たちは知覚と対象の二重の存在を想定する。(Loeb [2002 : 152])

哲学者たちは内的な知覚と外的な対象とを区別し、知覚には中断した存在があるけれども、外的存在には無中断な存在があると想定する。彼らはかようにして哲学体系、間接的ないしは表象の实在論を抱くようになる。実体や完全に似ている知覚の連続的存在への信念は3つの段階での反応の直接的な結果であったが、知覚と対象の二重存在への信念は間接的な結果である。ヒュームはこの第4の信念を、関係した対象に同一性を帰する傾向にまでたどるとローブは述べる(ibid. : 152)。

ヒュームは、知覚と対象との二重の存在という意見は、緩和的な療法(palliative remedy)に過ぎず、知覚を対象と見なす一般大衆の体系のもつすべての困難の上に、それに固有の困難を含んでいると主張し、知覚と対象との二重の存在という意見を直接に抱かせるような知性の原理、想像の原理はなく、この意見には、中断した知覚の同一性と連続性という通常の仮説を通過することによってしか到達できないとする。最初に知覚が唯一の対象であり、感覚に現れていないときでも存在し続けると確信しているのでなければ、知覚と対象が異なっていて、対象だけが連続的存在を保持すると考えるように導かれないうとい、この二重存在という仮説は、理性に対しても、想像に対しても、第一に推奨されず、その想像に対する一切の影響を、中断した知覚に同一性と連続性を帰する仮説から獲得しているという

(Hume [1739-1740/2007 :140])。

ローブは、ヒュームの議論において知覚と対象との二重存在の仮説が退けられることに及び、知覚の連続的存在への信念の場合、上記の(2)の段階での矛盾は、完全に類似する知覚の連続的存在への信念により解決されるが、この信念は安定した解決を受け入れない新しい矛盾に導くと述べ、ヒュームは彼の考察する事例に基づき、同一性を帰する傾向は解決され得ない不安定性に導くことを示唆していると理解する。知覚と対象との二重の存在への信念、物質的実体への信念、魂への信念は、根底にある不安定性の副産物であり、兆候であるという (Loeb [2002 : 154])。

4. 実体の想定と因果性における傾向

『人間本性論』第1巻第4部第3節「古代哲学について」*Of the ancient philosophy*において、ヒュームは、実体、実体的形相 (substantial form)、偶有性 (accidents)、隠れた性質 (occult qualities) などについての、古代の哲学の虚構を批判することによって、いくつかの有益な発見があるだろうと述べ、これらの虚構は、どれほど不合理で奇抜であろうとも、人間本性の諸原理にきわめて密接に結びついているという (Hume [1739-1740/2007 :145])。実体については、「2. 傾向についてのローブの議論」の節で取り上げたとおり、対象の継起する諸性質は、継起の一つの部分から他の部分に容易な移行によって運ばれ、そのような継起が、一つの持続する対象と見なされるが、大きな変化にあっては、同一とされていた対象を別個のものと見なさせるので、その矛盾を調停するために実体と呼ばれる、知られないあるものを想定するとされる。

ヒュームは、ペリパトス学派の哲学が、根源的な質料を、すべての物体において完全に等質であると主張し、火、水、土、空気を、これらが漸次たがいに循環し変化するという理由でまったく同じ実体からなると見なすといい、これらの各種類の対象に別個な実体的形相を付与し、実体的形相が、それらの対象の異なる性質のすべての源泉であり、各種類の対象の単純性と同一性の新たな基礎であると想定しているという。その想定の方法について、物体の感覚されない変化をたどるときは、物体がすべて同じ実体あるいは本質をもつと想定し、物体の可感的な相違を考察するときには、各物体に異なる実体と本質を帰し、対象を考察する両者の方法をほしいままにするために、すべての物体が実体と実体的形相とを同時にもつと想定するという (*ibid.* : 146)。

そして、ペリパトス学派の哲学者たちが、想像のあらゆる些末な傾向によって導かれていることを示している事例のうちで、共感 (sympathies)、反感 (antipathies)、真空の恐怖 (horrors of a vacuum) という彼らの考えほど顕著なものはないという。人間本性には、人間本性のうちに観察する情動を同じく外的対象に与え、人間本性にもっとも現前している観念をいたるところに見出すという、きわめて顕著な傾き (inclination) があると指摘し、そ

の傾きは、少し反省すれば抑えられ、子どもや、詩人や、古代の哲学者たちにあらわれるだけであり、子どもにおいては、子どもを傷つける石を打とうとする欲求において現れ、詩人においては、あらゆるものを進んで擬人化することに現れ、古代の哲学者たちにおいては、共感や反感というこれらの虚構に現れるが、子どもたちは年齢のゆえに、詩人たちは彼らの想像の示唆に絶対的に従うことを公言しているがゆえに大目にみななければならないが、哲学者たちをそのような重大な弱点において正当化するのを見出すどのような口実があるのかと問うている (*ibid.* : 148)。

さて、この「古代の哲学について」の節に続く、『人間本性論』第1巻第4部第4節「近代の哲学について」*Of the modern philosophy*において、ヒュームは、想像が哲学の一切の体系の窮極的な判定者であると認めているのだから、昔の哲学者たちが想像という能力を用い、彼らの論考において想像に導かれることを許しているからといって非難するのは正しくないと非難されるかもしれないといい、その非難に対する正当化として、想像における原理を区別する。一つは、原因から結果へ、結果から原因への習慣的移行のように、永続的で、抗しがたく、普遍的である諸原理であり、もう一つは、今しがた取り上げてきた、変わりやすく、弱く、不規則的な原理である。前者は、あらゆる思考や行為の基礎であり、それらがなくなれば人間本性は直ちに破滅し崩壊するに違いない。後者は、人類にとって不可避でも、必要でも、生活の行動においても役に立つわけでもない。反対に、弱い精神においてのみ生じることが観察され、他の習慣と論考の原理に反しているのもので、それらの原理をしかるべく対照させて対立させるならば、容易に覆すことができる。そこで、ヒュームは、哲学においては、前者が受け入れられ、後者が退けられるという (*ibid.* : 148)。

原因から結果への、結果から原因への習慣的移行とは、ヒュームの因果性に関する議論を言っている。『人間本性論』第1巻第3部では、因果論が主要な課題となっているが、ヒュームは、原因と結果の関係について次のように説明する。ある出来事に引き続いて他の出来事が起こったことを絶えず経験したというところから、一方の対象から他方の対象への恒常的連接 (constant conjunction) が見出される (*ibid.* : 65)。また過去における反復から何らかの新たな推論ないし推断もなしに生じるすべてのものは習慣と呼ばれるが、この習慣という起源から現前する印象に基づいて信念が生じるという (*ibid.* : 72)。信念とは、ある対象の印象が現前してくるときに、その対象に常に伴っている対象の観念を抱く際、その現前する印象に関係する、すなわち連合している生氣ある観念 (*ibid.* : 67) であり、『人間本性論』の付録 (appendix) では、「異なった感じ (feeling) を持つ、異なった感じの仕方で抱かれている観念である」 (*ibid.* : 400-401) と言い換えられている。ヒュームにおいては、必然的結合は習慣に基づく結合になる。原因と結果との間の必然的結合は原因から結果へと推論する基礎である。推論の基礎は習慣的結合 (accustom'd union) から生じる移行である。それゆえ、必然的結合と習慣的結合から生じる移行は同じである (*ibid.* : 111)。

また、ヒュームは知覚を印象 (impression) と観念 (idea) とに分けている。精神の一切の知覚は印象と観念に区分され、両者の相違は、精神を打って思惟と意識に入り込むときに伴う活力と生気にあるとされる。印象とは、はじめて精神に出現した感覚といったような精神が感じるものであり、きわめて勢いよく激しく入ってくる知覚であり、観念は思惟ないし論考における印象のかすかな像とされる (*ibid.* : 7)。印象と観念は単純と複雑に区分され、単純な印象と観念とは、いかなる区別も分離も受け入れない知覚であり、複雑な知覚は部分に区別できる。特定の色、味、香りといった、リングに統合された性質は、互いに分離できる (*ibid.* : 7-8)。

ヒュームは因果性に関する議論において、傾向がはたらいている箇所が見出される。

必然性の観念は何らかの印象から生じる。感覚によって伝えられる印象で、必然性の観念を生じさせることのできる印象はない。それゆえ、必然性の観念は、何らかの内的な印象、すなわち反省の印象から由来するのでなければならない。現在取り組んでいる事柄に何らかの関係を持つ内的印象は、習慣が生み出し、一つの対象からそれにいつも伴っていた対象の観念へと移ろうとする傾向以外にない。それゆえ、これが必然性の本質である。(*ibid.* : 111-112)

ここでは、傾向が内的印象であり、習慣から生じ、必然性の本質として位置づけられている。しからば、傾向が必然性の本質であるならば、因果性の議論は、外的存在を虚構する傾向に基づく議論、実体を虚構する傾向に基づく議論と対比して、永続的で、抗しがたく、普遍的である諸原理として認められるのだろうか。

因果性における習慣的移行という原理と、外的存在や実体を虚構する原理との大きな違いは、前者が現前する印象、あるいは現前した印象の経験に基づくのに対し、後者は、知覚の中断している間にあると想定される存在、大きな変化の中で同一性を保っている知られない何かを想定している点にある。ヒュームはあらゆる単純観念に単純印象が先行することを挙げ、さまざまな観念を印象に由来させることで検証している。例えば、『人間本性論』第1巻第1部第6節「様相と実体について」*Of modes and substances*において以下のように述べられている。

哲学者たち、彼らの論考の大部分を実体と偶有性との区別に基礎づけ、それらのおのおのについての明晰な観念を持っていると想像する哲学者たちに問いたいものであるが、実体の観念は感覚の印象から由来するのであるのか、それとも反省の印象から由来するのであるのか。尋ねるが、もし実体の観念が感覚によって伝えられるならば、どのような感覚によるのか、どんな仕方によって伝えられるのか。もし実体が目によって知覚されるならば、それは色でなければならない、耳によって知覚されるならば、音でなければならない。味覚によるならば、味でなければならない。他の感覚についても同様である。しかし、実体が色であるとか、音であるとか、味であるとか主張するものは誰もいない

であろうと信じる。実体の観念はそれゆえ、それが実際に存在するならば、反省の印象から由来しなければならない。しかし反省の印象は、情念や情動になり、それらの何ものも実体を表象することはあり得そうにない。それゆえ、個々の性質の集合の観念から区別された実体の観念をもつことはなく、実体に関して語ったり論考したりするときも、他のいかなるものも意味しないのである。(ibid. : 16)

ヒュームにおいては、実体の観念は、単純観念の集合にほかならず、これらの単純観念は、想像によって統合され、一つの特定の名称が与えられているという (ibid. : 16)。このように、印象にまで由来させることで観念を検討している立場からすれば、印象を持たない観念、知覚されない存在の観念や、実体の観念は虚構とされる。印象に由来するという観点からすれば、外的存在や実体を虚構する傾向は、それが因果性の議論において重要な役割を果たす傾向と同じもののだとしても、人類にとって不可避でも、必要でも、生活の行動においても役に立つわけでもないと解される。

5. 不快感に由来する存在論

先に、傾向について、以下のとおり説明されると述べた。感情あるいは情念に矛盾するのは、外的対象の対立から生じるものであれ、内的原理の争いから生じるものであれ、不快感を与える。逆に、自然の諸傾向と適合し、それらの満足を外的に促進するか、それらの動きと内的に一致するものは何であれ、快感を与える。知覚の中断の場合、互いに類似する知覚についての同一性の考えとそれら知覚の現れにおける中断との間に対立があるので、精神はこの状況において不快になり、この不快からの救済を、一方の原理を他方の原理の犠牲にすることに求めようとする。互いに類似した知覚に沿っての思考のなめらかな移行は、それらの知覚に同一性を帰するようにさせるので、この見解を捨てることは躊躇される。それ故、知覚は、もはや中断してはいず、変化しない存在と同じく連続した存在を保持し、完全に同一するものであると想定する (ibid. : 136-137)。

傾向が反省の印象であり、知覚の中断の場合、互いに類似する知覚についての同一性の考えとそれら知覚の現れにおける中断との間に対立があるので、精神はこの状況において不快になり、同一性を帰するようになるならば、不快感によって外的存在に関する議論を基礎づけることはできないだろうか。

そこで、反省の印象についてまず検討する。ヒュームは、印象を感覚の印象と反省の印象について次のように説明する (ibid. : 11)。感覚の印象は未知の原因から原初的に起こり、反省の印象は大部分観念から来るが、この印象は模写され、印象がなくなっても残る。これが観念と呼ばれる。その快苦の観念が再び現れてくると、欲望や恐怖などの新しい印象を生み出す。これが反省の印象と呼ばれるものである。『人間本性論』第2巻第1部「自負と卑下について」*Of pride and humility*第1節「主題の区分」*Division of the subject*ではこの感覚

の印象が根源的な (original) 印象、内省の印象が二次的な (secondary) 印象に置き換えられ、この二次的な印象が情念 (passion) や情念に類似した情動 (emotion) であるとされる (*ibid.* : 181)。また、ある種の穏やかな欲求や傾性 (tendencies) があり、それは真の情念であるが、精神にほとんど情動を生み出さず、直接的な感じや感覚よりもそれらの影響によって知られる、と述べている (*ibid.* : 268)。傾向が反省の印象であるならば、こうした穏やかな情念と傾向を関係づけることも可能である。

ヒュームは、『人間本性論』第1巻第1部第1節「観念の起源について」*Of the origin of our ideas*において、観念を思考や論考に現れる印象のかすかな像を意味するものとし、例えば、現在の論述が引き起こす知覚のうち、視覚や触覚から生じるものと、その論述が引き起こす直接的な快ないし不快感 (uneasiness) を除けば、一切の知覚が観念であるという (*ibid.* : 7)。例えば、目を通じて知覚される光景が不快感を催すとき、その光景が印象として精神に勢いよく入り込んでくると、不快感を催すことが同時であるならば、不快感を根源的な印象として理解することができるかもしれない。しかし、その光景が知覚されることなくして、不快感が生じることが考えられるだろうか。知覚の中断の場合、互いに類似する知覚についての同一性の考えとそれら知覚の現れにおける中断との間に対立があるので、精神はこの状況において不快になることは、この状況がなければ不快になることはないだろう。例えば、知覚の中断を挟んだ知覚が類似しているのが知覚されるとき、中断の前後の知覚を同一とすることと、別個のものとする事との対立が生じて不快になることを考えてみれば、そのような状況をもたらした知覚、この場合は中断の前後の知覚はどのような感覚であれ、印象として精神に入り込んでいると理解される。したがって、不快感を外的存在の基礎づけとして理解することは、それに先立つ印象の上に理解されることであり、知覚の中断の場合、知覚していたものが何であれ、中断の間の知覚、印象は存在せず、それを想像で虚構するにせよ、その虚構からいかなる信念が生じるにせよ、印象に基づくヒュームの哲学においては些末なものとなる。

引用文献

Hume, David. 1739-40/2007: Norton, David Fate; Norton, Mary J. (eds.), *A Treatise of Human Nature: A Critical Edition*, Vol. 1: Texts, *The Clarendon Edition of the Works of David Hume*, Oxford: Clarendon Press.

Loeb, Louis E. 2002: *Stability and Justification in Hume's Treatise*, New York: Oxford University Press.

Propensity on Hume: The Propensity to Ascribe Identity to Related Objects

OHSHIKA, Katsuyuki

Abstract:

Hume argues that Propensity feign the continued existence of body during the interruption of perception, and makes the mind regard the interrupted bodies as same.

Concerning the propensity to ascribe identity to related objects, Loeb formulates Hume's explanation of belief in continued existence of body during the interruption of perception, belief in substance, and belief in soul in following general schema.

- (1) We ascribe identity to the successive objects due to a propensity to ascribe identity to a succession of related objects.
- (2) The interruptions or changes in the related objects induce us to regard them as different or diverse.
- (3) In an attempt to resolve or remove the contradiction, we suppose that there exists an object that is uninterrupted and invariable, and hence identical in the strict sense.
- (4) Reflection on the phenomena of double vision and perceptual relativity shows that perceptions do not have an existence independent of the mind, and hence do not have a continued existence when not perceived.
- (5) Philosophers suppose the double existence of perceptions and objects in order to relieve the discomfort due to the contradiction at stage 4.

In the case of the belief in the continued existence of perceptions, Loeb says that the contradiction at 2 is resolved by the belief in the continued existence of perfectly resembling perceptions, but this belief leads to a new contradiction at 4, which does not admit of a stable resolution. At 5, Hume asserts that there are no principles either of the understanding or fancy, which lead us directly to embrace the opinion of double existence of perceptions and objects.

Keywords: External Existence, David Hume, Propensity, Theory of Causation, Impression